

東北圏の中山間地域の再生

里の知恵と技術が宝もの

—地元学から生み出す森里川海をつなぐ暮らし再生プロジェクト—

NPO 法人里の自然文化共育研究所 専務理事

山形大学大学連携推進室 准教授

出川 真也

1、里の自然とふるさと文化のかかわり—地域の暮らしに根ざした視点の重要性—

(1)里の人々が自然とともに織りなしてきた暮らしの文化—知恵と技術—

(2)基盤となっているのは

- ・自然環境（里山、川、農業）
- ・生活文化（郷土料理、もの作り、住まい、伝統行事・年中行事）

→里地里山の自然や文化は人々の手が継続的に入り日々の営みがなされる中で保全。

2、地元学のすすめ—里の暮らしの現状はどうなっている？—地元学ぶ「地元学」—

(1)地域集落の自然環境と生活文化の現状を把握

(2)地域集落の人々の意識を把握

- ・地域の住民自らがまず学習し把握することが次への行動へとつながる。
- ・その中で外部者を「活用」することも有効

(3)地元学のすすめ

- ・農村の何気ない素材に価値を見出し、力づける。
- ・地域づくり計画は住民が行う。
(調査実施→アイデア出し→立案→計画→実施体制作り→実施)

※議論は何も生まないということも多い。まずは自分たちで歩いて調べる、実験的にやってみる、そしてその結果を見すえて議論するというスタンスが前進する鍵。

3、地元学によって見えてきたもの

(1)住民による地域の再発見

→山村住民は「何もない村」と愚痴をいいがち。外部者の目線の違いを利用して、山村の自然や文化を住民自らが調べ、住民が地域の価値を再発見するプロセスを重視。

(2)地域内コミュニケーションの活性化

→次のステップの具体的な行動を起こすための基盤となる

(3)特定の領域だけでなく、互いが互いに支えあうものとして、数多くの里の素材が学習の対象としていくこと。

4、里地里山の地域資源を活用した活動の展開—角川里の自然環境学校の事例から—

- (1)企画・運営は地元が主体。里の住民が先生役
- (2)多様な住民が参画できるプログラムづくり
山、川、食、農、ものづくり、民話など地域資源や生活文化が学習プログラム
- (3)持続的な活動ツーリズムの開発と産品開発が相乗的に展開。

5、今後の展開について—NPO 法人里の自然文化共育研究所の設立と連携活動の活性化—

- (1)地域集落を基本単位とした里作り活動が各地で展開する状況。
 - ・圏域の多様な地方・地域をいかにつなぐか？
- (2)多主体連携、広域連携へ
 - ・ひとつの主体ですべてをまかなうのではない（そもそもそれは無理な話）。
 - ・それぞれの多様性を生かしながらも役割分担しながら組織だっておこなうことが重要。
- (3)現場主体のスタンスは堅持
 - ・組織的になると事務局がえらくなりがち。現場や活動主体が主役となる事務局運営を。
- (4)システムは日々変わる
 - ・活動は明確に目標が設定され直線的にそこに向かって進むわけではないので、常に運営方法や活動内容は変わるということを前提にして、むしろ、硬直化しないあり方を志向するのがコツ。
- (5)活動の中で何をを目指しているのか、根本的な哲学を常に考え続けること
 - ・里の暮らし、自然、文化、好きな時間、自分の人生・・・

6、地域住民と多主体連携による地域計画作り

- (1)地元から学ぶことを通して、地域の意思決定は地域で、という基本スタンス
 - ・教える、指導する「教育」→共に学ぶ育てる「共育」へ
- (2)自律と自治
 - ・外部の目線の違いも活用しながら自分たちで調べる、自分たちで決める。
そして、外部の力も借りながら活動する。
- (3)地域 NPO 組織を育てることの重要性—連携する地域パートナーが育つ環境づくり—
 - ・多様な主体の連携調整
 - ・市町村域・県域を超えた連携へ